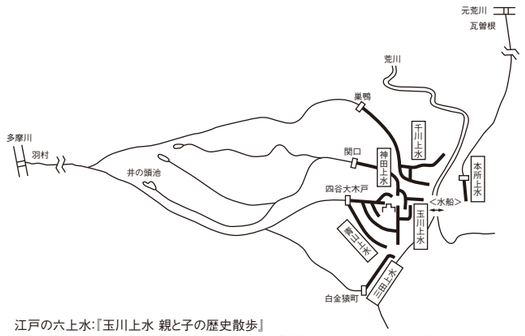
けんせつのでんせつ シリーズ57

水道は火事を呼ぶ

はじめに

江戸時代の初期から中期にかけて、急速に拡大する江戸の町を潤すため、水道が次々と建設されました。まずは井之頭池を水源とする神田上水。次いで承応年間には多摩川を水源とする玉川上水。万治2年（1659）には、埼玉郡の瓦曽根溜井の水を引いて本所上水。その後、玉川上水を分水して万治3年（1660）に青山上水、寛文4年（1664）に三田上水、少し降って元禄9年（1696）に千川上水が新たに開かれました。これら6つの上水道を総称して、「江戸の六上水」といいます。

しかし、せっかくできた上水のうち、神田上水と玉川上水を除く4つの上水は、享保7年（1722）に突然廃止されてしまいます。



江戸の六上水:『玉川上水 親と子の歴史散歩』
(肥留間博 著　公益財団法人 たましん地域文化財団　1991年)に掲載の図を加工

廃止理由

幕府の記録を見ると、本所上水については「中興より懸り候儀ニ候、殊ニ水も不参候故、自今弥相止候…」とあり、途中からできた上水であり、水勢も弱くなったことから廃止されたのだと記されています。

一方、千川・青山・三田の3上水については「中興より懸り候事に候故、自今相止候間…」、つまり途中からできた上水だから廃止する、としか書かれていません。

この4つの上水が、一斉に廃止された理由については、日本水道史上の大きな謎とされているのですが、水道が火事の原因になったからという不思議な話が、水道史関連の書籍などには必ず紹介されています。

室鳩巣の建言

発端は当時の将軍だった徳川吉宗のブレーンの一人、儒学者の室鳩巣の建言『獻可録』によります。これが提出されたのは、4つの上水が廃止された半年ほど前の享保7年3月と考えられており、その中で彼は江戸の火災の原因について滔々と自説を述べています。

「老人たちに聞いたことだが、明暦より前は大風が吹いても重く、力があるので大木や家が倒されることはあったが、今のように浮ついていなかったので、ゴミなどが吹き上げられることはなく、火災も頻繁ではなかった。今は大風がふけば、空も見えないぐらいゴミが吹き上がり、火災もたびたび起こるようになった。

長崎にも水道が造られたが、唐人がこれを見て、ベトナムでは水道があるところに、たびたび火災が起こるので、長崎もそうなるだろうと言ったが、その通りだった。

なぜ水道と火災が関係するのかよくわからないが、唐人や老人の話をきいて、納得することがある。今は江戸中の地下は縦横に水道が走り、地脈を断っているので、地気が分裂して集まることがなくなった。風は大塊の噫気と荘子も言っているように、空に吹いているようでも元来は大地の息であり、地より生ずるものである。地気がこのように中虚になっては、下に拘束する力がなくなり、近年の大風は必ず狂ったように浮つくので火を誘い、狂風に乗じて勢いを増し、十町、二十町の外へも燃え広がるようになった。

それのみならず、土は水気を含んで常に潤っているが、地中に水道があると同気相感の道理で土の潤いが水道に抜けて土が乾いてしまい、そこから生じる風も乾いて爛火を催すのだ」

江戸時代だから…

この後に室鳩巣は、水道は火災の原因となるので井戸が掘れない地域を除いて、すべて潰すべきだと述べているのです。このような考え方は易学に由来し、例えば『元延実録』には明暦3年（1657）に起こった「明暦の大火」を、同じような理屈で予言した易学者の話が記されています。

この解釈については「防火に害があるとして水道を廃止することは誤解もはなはだしいものだ。しかし当時としてはこれが立派な意見として受け入れられ…」などと、当時の非科学性が原因とするものがあります。

しかし、江戸時代の人々だから荒唐無稽な考え方がまかり通るというのは、安易に過ぎるように思えます。水が来なくなった本所上水はともかく、正常に機能している上水道を、儒学者の建言のみで潰すとは、いくら何でも考えにくいからです。

大岡越前

例えば、江戸の上水廃止を考える上で、当時の江戸町奉行・大岡越前守忠相は、配水域である江戸の町を支配していたことから重要な人物です。また、彼は上水が廃止される直前の享保7年6月に関東地方御用掛を兼務することになりました。

前号でも紹介しましたが、大岡は将軍吉宗とともに「享保の改革」を推進した人物でした。そして、重要な施策の一つに幕府財政の立て直しがあり、新しい財源を生み出すために新田の開発が推進され、江戸近郊では玉川上水が通る武蔵野で新田が開発されました。大岡はこうした開発などのリーダーとして、関東地方御用掛に任じられたのです。

武蔵野新田の開発

そして新田の開発に何より必要なのは水でした。武蔵野新田開発の舞台となる広大な武蔵野台地は、パサパサな赤土に覆われた水に恵まれない土地であり、玉川上水からの分水が不可欠でした。

玉川上水からの分水は全部で30余りを数えますが、そのうち半分近くにあたる12分水は、新田開発が活発となった享保から元文というわずか15～20年間に開削されたのです。羽村の取水堰から江戸の町までの43㎞ほどの間で、玉川上水の水需要が圧倒的に増えていたことがわかります。

田中丘隅の『民間省要』

ここで、大岡が武蔵野新田の開発に携わる享保7年から、一年だけ時間を遡ってみたいと思います。その年に多摩川下流にある川崎宿の名主だった田中丘隅は、将軍吉宗へ農政・民政の意見書『民間省要』を提出しました。田中はすぐに吉宗に認められ、地方巧者として大岡グループの一員に加わり、開発や治水事業を行うわけですが、『民間省要』の中で彼は次のように述べています。

「多摩川の水は下流域で数万町の水田を潤していますが、近ごろ大きな異変が生じています。それは武蔵野に新田の村ができつつあり、また千川上水が近年分水されたため、羽村の取水堰では玉川上水に水を多く流すように、堰を強くしています。そのため、堰のすぐ下流では日照りの時には足も濡れないようになってしまいました。多摩川下流域の水田も水不足で荒れています」

この意見書からは、武蔵野新田が本格的に開発される前にも関わらず、すでに多摩川では深刻な減水を生じ、玉川上水の取水量が限界近くになっていたことがわかります。つまり、玉川上水から武蔵野に新しい分水を引くためには、開発に必要となる取水量を割り出し、その確保が必要となったのです。

田中丘隅の墓　妙光寺境内（神奈川県川崎市幸区小向町）

おわりに

神吉和夫氏の論文「享保七年江戸四上水廃止の研究」を見ると、廃止された上水のうち、玉川上水から分水していた青山・三田・千川の3上水の取水量と、武蔵野新田開発後に造られた分水の取水量はほぼ同じだということがわかります。

つまり、3上水は武蔵野新田開発のために廃止され、そして既に役に立たなくなっていた本所上水も合わせて潰したという考え方が成り立つように思えます。しかし、たとえ上水の廃止が、武蔵野新田のためだとしても、開発を優先させるために江戸の人々から生活用水を奪うとは、なかなか公表できるものではなかったでしょう。廃止理由が明確でないのは、そのような事情があったからかもしれません。

（文：江口知秀）

現在の多摩川下流域。田中丘隅の『民間省要』によれば、享保の初年には、玉川上水への取水量が増えて、水が涸れた状態になったという